

新刊紹介

奥田洋子

J. H. Stape, ed., *The New Cambridge Companion to Joseph Conrad*

Cambridge University Press, 2015. 206pp.

本論集は、1996年に出版された *The Cambridge Companion to Joseph Conrad* (邦題『コンラッド文学案内』) を大幅に改訂した論集で、編者も同じ J. H. Stape であるが、13名の執筆者は編者を除いてすべて入れ替わっている。編集方針も、編者によると、前回の論集がコンラッドの作品を「先行研究に基づいた評価」とおして読者により身近なものにすることを目指していたのに対し、今回の論集は「過去20年間に新たに切り開かれた研究領域を前面に打ち出し」、「最近注目されるようになった理論的・解釈学的視点まで斟酌したもの」となっている。前回の論集が作品論中心なのに対し、本論集は、コンラッドを多種多様な枠組みから検証している点で、Allan Simmons 編 *Conrad in Context* (2009) に近いとも言えよう。

各章を概観すると、まず第1章では、*Conrad in Context* で20世紀後半の批評史を担当している Andrew Purssell が、コンラッドをキャンノン形成という側面から取り上げている。F. R. Leavis 等による伝統的なコンラッドのキャンノンの生成過程と1970年代以降の解体過程を検証し、最後に、いかなるキャンノンであろうとキャンノンというものは、“the product of certain cultural and historical factors” (11) であると結んでいる。

第2章は、*Conrad in Context* の編者 Allan H. Simmons による“*Heart of Darkness*”の文体論的分析である。文体論と言っても狭い意味でのレトリックではなく、比較的最近登場したスタイル論 (stylistics) 的な分析である。具体的には、筆者が“the stylistic intricacies” (18) と呼ぶ作品の構造上の特徴や一人称の語りの効果、曖昧性を生む印象主義的な描写や言語の詩的な

使い方などが緻密に、また説得力を持って検証されている。

第3章では、*Conrad and History* (2010)の著者 Richard Niland が中期の代表作三作—*Nostromo*、*The Secret Agent*、*Under Western Eyes*—を取り上げて、コンラッドの政治小説中における政治思想と現実との乖離を、作品および作品が喚起する当時の支配的哲学や社会学思想からの引用を数多く挙げて論じている。と同時に、コンラッドがこれらの価値体系を、モダニズム的な視点から、特にアイロニーの効果でもっていかに崩しているかをも指摘し、“Conrad’s irony ensures that absolute readings of his novels’ politics are, happily, elusive.” (42)と結んでいる。

次に第4章では、香港大学の Douglas Kerr が、過去半世紀に及ぶ理論的批評を“*The Secret Sharer*”を具体例に検証している。Kerr は冒頭で、“Criticism tends to lag behind creative work, and it could be argued that the theory revolution of the twentieth century was a belated attempt to rise to the challenge of the great Modernist writers” (45)と述べ、全体を三つのセクションに分けてまず「作者」のセクションでは、伝記や心理学に基づく理論的批評を、次に「テキスト」のセクションでは物語論や脱構築批評、ジャンル論、テキスト間相互関連性批評などを、そして最後に「歴史」のセクションでは、マルクス批評やポストコロニアリズム、新歴史主義などの理論的批評を取り上げている。そして、これらの批評を応用するにあたっては“*The reader has a duty to be responsible to the text, and sometimes this will require us to wait patiently for the text to reveal what kinds of critical attention it will respond to*” (45)との注意も与えている。

第5章では“*the dynamite novel*”の研究で知られる Andrew Glazzard が、コンラッドの書簡および二つの自伝的作品 *The Mirror of the Sea* (1906) と *A Personal Record* (1911)の再評価を試みている。*The Mirror of the Sea* は出版当時高い評価を受けたが現在ではそれほど高く評価されていない。だが、Glazzard によると、実は同時代の評価の方が正しいのであり、自伝とは言え、その中に見出される虚構性がこの作品をフィクション、ノンフィクションのジャンルを超えた価値ある作品にしていると言う。一方、*A Personal Record* は、その時間の流れを無視したモダニズム的な特徴が当時の書評家によって必ずしも評価されなかったが、最近の批評家によっては、自伝的

作品においてもそれ以外の作品と同様に、形式と内容が密接に結びついていることが指摘されている。最後に九巻に及ぶ書簡集は、その規模や内容の深さ・豊かさから見て、今後さまざまな分野において当時の歴史に光を当てる可能性を秘めている。だがその一方で、コンラッドが受取る相手によって伝達方法(code of epistolary behavior)を変えていたことを考慮すると“Conrad’s efforts to work memories into impressions and, through the power of imagination, to make the actual yield to the ideal are not confined to his most admired novels but are evident throughout his writing.” (71)であり、よってこれらの書簡中の言葉をそのまま作品の解釈の裏付けとするのは危険であると述べている。

第6章では、*Joseph Conrad and Popular Culture*(2005)の著者 Stephen Donovan が、連載という発表形式がコンラッドの作品に及ぼした影響について詳細に検証している。コンラッドは同時代の他の作家と比べても最初は連載形式で発表された作品が多く、そのことが作品の生成に及ぼした影響は小さくはない。編集者の干渉や挿絵画家との対話が作品の主題や形式を決定することもあり、*The Mirror of the Sea* と *The Daily Mail* との密接な関係のほか、*Nostromo*、*The Secret Agent*、“Heart of Darkness”や *Victory* などに対する編集者の干渉例が挙げられている。さらに日本での例として『英語青年』が連載途中だった“Tomorrow”の連載を打ち切り、時勢を反映した“YOUTH”に変更した例が、設楽靖子氏の情報提供に基づき一例として挙げられているのが興味深い。さらに、“Conrad First: The Joseph Conrad Periodical Archive”のHPの登場で、今後いわゆる Book History と呼ばれる作品の受容歴を明らかにする研究領域の発達が見込まれる。

続く第7章は、*The Cambridge edition of the Works of Joseph Conrad*の編集主幹のひとりであり、本論集の編者である John Stape によるコンラッド作品の本文批評(textual criticism)の現状報告である。ここで言う本文批評とは、テキストの批評的分析・解釈ではなく、手書きやタイプ原稿、定期行物や書籍の形で発表された本文を考証して、作家自身が意図したと思われる本文に一番近い基準となる「正典」を編集するための研究であり、前章の連載制度とも一部重複している。1980年代に登場した「社会的」なテキストという概念が本文批評に理論上の変革をもたらしたことに加えて、電子

版のハイパーテキスト（複数のテキストを相互に関連づけて一つのデータとして扱う）の登場など、デジタル技術の発展によってかつては入手困難であった原稿が容易に入手できるようになったことが、この研究領域の発達を促した。具体的には、アメリカで連載された際に“*Heart of Darkness*”や *Lord Jim*, 特に *Victory* が編集者の干渉などにより改悪され、また、“*An Outpost of Progress*”や“*Heart of Darkness*”が連載の際、コンラッドの意図に反して分割された。そして最後に筆者は、“The historical analysis of a text’s production is, and will almost certainly remain, a major scholarly endeavour requiring . . . a wide knowledge of the social, political and cultural history of the period and the contexts of writing” (99-100)と結んでいる。

第8章は、*Conrad, Language and Narrative* (2002)の著者 Michael Greaney によるコンラッド個人の文体研究で、コンラッドの文章表現上の特徴を詳細に検討している。大きな特徴としては、複雑な言語間空間（ポーランド語やフランス語の影響）における執筆が生み出した、単なる英語力を超えた、斬新な語義や詩的イメージ群、統語法の創出、時間の移動や延期（たとえば *delayed decoding*）の技巧が挙げられる。また、Leavis が“*obscurity*”と呼んで批判した形容詞を多用した表現も、見方によっては、否定と不確実性を強調する近代哲学における懐疑論と一致しているともできるという。最後に Greaney は、“No one is born speaking the English language, and it takes a writer like Conrad, one of whose greatest achievements was to make English a powerful, awkward ‘*langue étrangère*’ for all of his readers” (113-14)と述べて、英語の母語話者でないからこそコンラッドが成し得た英語への貢献を評価している。

第9章では、*Our Conrad: Constituting American Modernity* (2010)の著者 Peter Lancelot Mallios が、コンラッドの受容史を、(1) 生前から没後直後にいたる英米を中心とした受容状況、(2) 1940年以降の Leavis 等による再評価、(3) 1960年代から現代に至るまでのポストコロニアル批評を中心とした受容状況、そして(4) 今世紀における受容状況と今後の展望、の4つのセクションに分けて解説している。コンラッドは“a writer of unusual international range and implication”(116)であり、様々な国籍や立場の読者が、それぞれの“*special vantage points*”からコンラッドの受容に貢献している

が、その下地は作品の技巧中にある。また、コンラッドは一貫してその歴史的予知力が高く評価されてきたが、その一方で、評価が変動する嫌いのある作家であると言う。

第 10 章は、ダラス大学の Debra Romanick Baldin によるジェンダー論の側面からの検証である。Baldin は導入部で、情緒的連想が変遷する中でジェンダーという語を定義することの難しさを指摘した上で、具体例として“*Heart of Darkness*”における男性らしさと女性らしさの二項対立の抱えるジェンダーの分類問題、*The Secret Agent* におけるジェンダーの特徴と語りの声の関係の問題、ジェンダーとエロス（性愛）の問題などを論じている。

第 11 章は、アジアを舞台とした作品を研究中の Andrew Francis によるポストコロニアル批評の観点からの検証である。Francis は導入部で、“postcolonial theory is a contested field”と述べてその理由を挙げた上で、(1) ポストコロニアル批評の歴史、(2) “*Karain: A Memory*”へのポストコロニアル批評の応用、(3) 作品中で前景化されていない（被）植民者文化の重要性、(4) ポストコロニアル批評におけるコンラッドの中心的役割と後続作家への影響を論じている。

第 12 章では、ロンドン在住の著作権代理業者兼小説家の David Miller が、コンラッドの現代作家へのグローバルな影響を論じている。Virginia Woolf のコンラッド追悼記事中の“what of Conrad will survive and where in the ranks of novelists we are to place him”という問いに今日の視点から答えるという枠組みで、20 世紀前半の T. S. Eliot や Scott Fitzgerald から今日の Juan Gabriel Vásquez や John le Carré などの作家まで、ヨーロッパ、南北アメリカ、オーストラリア、アフリカの四大陸に及ぶ 40 名余りの作家や歴史家、ジャーナリストを、作品や書簡からの引用、テーマ上の影響、インタビュー中の言及など影響力の現れ方によって分類して紹介し、“Conrad was the first true novelist of globalization, and . . . his writing and vision has inflected the writings of those writing almost a century after his death on several continents and in a wide variety of genres.” (167)と結んでいる。

最終章は、*The Theatre of Joseph Conrad: Reconstructed Fictions* (2005) の著者 Richard J. Hand によるコンラッド作品の多種多様な翻案物の紹介である。1990 年代後半以降のコンラッド作品の翻案を、(1) 映画やテレビ・

ラジオ番組、(2) 劇やオペラ、さらに(3) デジタルゲームなど帰属は明記されていないものの「コンラッド風」と認められる類いの翻案の三つのセクションに分けて論じ、“In the ever-proliferating culture of adaptation, Conrad is a particularly interesting case. Since the 1990s, the oeuvre has provided dynamic source texts for the widest range of media” (185)と結んでいる。

以上見てきた13の小論はどれも読みごたえのある内容であるが、なかでも第6章 *Serialization* と、第7章 *Texts* とは、他の研究領域への影響が大きい点、重要かつ啓発的である。他方、第3章 *The Political Novels* はやや引用過多で説明不足の嫌いがあり、また、第12章 *Conrad and Contemporary Writers* は、コンラッドへの言及やコンラッドについてのエッセイからも影響が明らかである日本の村上春樹や宮本輝、中国の老舍(1899-1966)¹ などアジア圏の作家への視線が抜け落ちている。また、今後の読者の拡大を予想するにあたって筆者が、“It is safe to say he will be read more widely at the end of this century than he was at its beginning, reaching audiences in developing countries and taking his vision to them” (168)と述べ、「発展途上国の読者」を強調する根拠もはっきりせず、アジア圏の「先進国の読者」としてはやや違和感を覚えた。

本論集は、さまざまな研究領域における一流の研究者が、それぞれの領域の最新状況を紹介したすぐれた解説書である。しかも特定の研究領域や理論を強調することなく、コンラッドの研究領域を広範囲に偏りなく紹介している。その背景には、これらさまざまなコンテクストにおける研究成果を包括したところにこそこの作家と作品の真実が見出せるという編者の姿勢が感じられる。初心者はもちろん一般のコンラッド研究者にとっても読み応えのあるコンラッド研究の手引きであると言えよう。

注

¹ A.N.Ning 氏による情報

(おくだ ようこ 跡見学園女子大学教授)